HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	要求性に基づく未完結文の分類
Author(s)	劉, 暁芊
Citation	国語国文研究, 147, 46(15)-34(27)
Issue Date	2015-10-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93156
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_147_46-34.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

要求性に基づく未完結文の分類

劉　　暁　苹

1　はじめに

日本語の日常会話では、述部後置という文法的な特徴と、言葉を使用する人の心理によって、完結文より未完結文のほうが頻繁に使用されているという現象が見られる。このうち、「～から」や「～けど」などの連用修飾節で終わる未完結文は、従来言いさしとして分析されてきた。それらの未完結文は、形式上は主節を欠くところが同じであるが、意味の完結度と伝達機能上の効果はばらつきがある。意味機能は、未完結文の形式と緊密な関係にある場合もあれば、未完結文の形式のみで判断しにくい場合もある。伝達効果上は、聞き手への働きかけ性が強い場合もあれば、単に話し手の感情を表す場合もある。そこで、本稿の目的は主節を欠く不完全な文の分類基準を明らかにし、その種類を明確にすることである。具体的には、分類の基準を要求性に求め、未完結文を【受容要求】【行為要求】【調整要求】【要求性なし】の四種類に分類した後に、実例を通して、典型的な連用修飾節で終わる未完結文を考察する。

2　先行研究と問題点

主節欠如の未完結文に関する研究で、白川(2009)は代表的なものである。白川(2009)は主節欠如の文を言いさし文と呼び、「言いさし文」[1]と「完全文」を統一的に説明する立場から出発し、①「言いさし文」が独立文と同等の完結性を持つのはなぜか②「言いさし文」はどのような機能を持つか③日本語の文法体系の中で従属節をどのように位置づけたらよいか—という三つの問題点をもって「言いさし文」を考察した。

それらの問題点を解決する前提として、白川（2009）はまず研究対象である「言いさし文」の範囲を限定した。具体的には、まず「形式上、主節を伴わずに従属節のみで表現される文」という広義の言いさし文を、「言いさし」と「言い残し」の二種類に分類した。「言いさし」は「言うべき後件を言わずに中途で終わっている文」であり、

[1] 白川（2009）によると、括弧なしの言いさし文は主節を伴わずに従属節のみで表現される広義のもので、括弧つきの「言いさし」は「言い終わり」（「関係づけ」と「言い尽くし」を含む）のみを指すと述べた。

「言い残し」は「従属節だけで言いたいことを言い終わっている文」である（白川 2009：7）。そして、「後件に相当する内容、すなわち、従属節の内容と関係付けられるべき内容が文脈上に存在するか否か」によって、「言いさし文」を「関係づけ」と「言い尽くし」に分けた。その結果、白川（2009）は広義の言いさし文を次の三種類に分類した。

a．関係付け：関係づけられるべき事態が文脈上に存在する文
b．言い尽くし：関係づけられるべき事態が文脈上に存在しない文
c．言い残し：言うべき後件を言わずに中途で終わっている文

白川（2009：11）の（24）からの引用

発話の完結性に着目し、言いさし文の中に完結度が違うものがあるという白川（2009）の考えに問題はないが、言いさし文を実際に上記の三種類に明確に分類できるかどうかはもう少し検討する余地があると思われる。

まず、「言いさし文」と「言い残し」の定義にある「言いたい」と「言うべき」を判断するには、科学的な基準を決めにくい。そして、「言い尽くし」を説明するときに、白川（2009）は「母語話者であればこの後に続くべき後件を待っている人はいないだろう」や「『相手の発言の途中に割り込んでいる』と感じる母語話者はいないだろう」（白川 2009：10-11）という根拠を述べた。つまり、「言い尽くし」という従属節の後に主節がないことは、母語話者にとって自明なことであると白川（2009）は考えていると理解できる。しかし、学習者の立場を含め、通言語学的な観点から日本語の言いさし文を考察するには、「言い尽くし」であるかどうかについて、もうすこし明確な判断基準が必要であろう。最後に、「関係づけ」と「言い尽くし」を区別するときに、白川（2009）は文脈という基準を設定しているが、具体的に何を指すのかを説明する必要がある。

以上より、本稿は白川（2009）の考えを参考にした上で、未完結文の分類における改善案を考えてみる。

3　未完結文の分類方法

3.1　未完結文の定義と分類基準

主節欠如の未完結文はその欠如の理由によって、様々なタイプに分けて考えられるが、本稿は、発話者の積極的な意思によって主節を省略したり完結を避けたりする場合に限定する。未完結文を「発話者の積極的な意思によって、主節が発話者の発話の前後の言語形式に現れていない従属節のみで終わる発話」と定義する。また、今まで言いさしとして議論されているのは連用修飾節がほとんどであるということを考慮した上で、本稿では接続助詞「ので/んで」「から」「たら」「ば」「と」[2]「のに」「が/けど」

[2] 本稿では、「と」の引用用法を対象外にする。

「し」「て」[3]という典型的な連用修飾節で終わる発話に限定する。

本稿は、白川（2009）の「言いさし文」と「完全文」を統一的に説明する立場を継承する。Searle(1969)は、すべての発話にある種の発話内力が存在すると考えている。発話内力は、聞き手に対する作用という点において、要求性を潜在させていると解釈することが可能である。要求性はすべての発話にあると考えられるので、要求性を基準とする分類により、未完結文を完結文と関連付け、すべての発話に対して統一した視点からの分析が可能になる。そこで、本稿は要求性に基づく未完結文の分類を提案する。

本稿は、要求性に関して次のように主張する。要求は、聞き手に対する、言語を通じた働きかけである。発話の要求性はまず無標と有標の二つのレベルに分けて考える必要がある。

私達は相手との人間関係を構築し、会話を続けるために、その前提的な条件として、相手の発話を聴き、理解し、反応することが基本とされる。こうした基本的な特質は、会話の進行を保証して社会的な礼節を持つという意味があるため、すべての発話に存在する無標な要求であり、つまり社会規範的要求と言えよう。具体的には、話し手の発話を聴くという【注意要求】、話し手の発話内容を理解するという【理解要求】、話し手の発話に対して反応するという【反応要求】[4]がある。

普遍性を持つ無標な要求に対して、有標な要求はすべての発話に必ず存在するものではなく、個別の発話に現れるものなので、会話的要求とも呼ぶ。具体的には、【受容要求】【行為要求】【調整要求】がある。【受容要求】は、話し手が聞き手に関する発話をした際、聞き手にその発話内容を受け入れるよう求めることで、例えば(1)である。その受容の内容は①聞き手向けの行為②聞き手に関する評価③聞き手の世界知識への関与—の三つに分類され、(1)の場合は①で、聞き手である樽見に向かう行為の【受容要求】である。【行為要求】[5]は聞き手に明確な身体行為を求めることで、例えば(2)である。【調整要求】は聞き手の世界知識[6]の調整を求めることで、例えば(3)である。【受容要求】【行為要求】【調整要求】の三つの要求は排他的な関係ではなく、一つの発話が同時に二つ以上の要求性を持つことも可能である。

(1)　白尾「樽見、必ず甲子園に連れてってやるからな。」

---

[3] 本稿は形式上に現れている部分に注目し、「～てください」を除き、「て」で終わるものを全て研究対象として扱う。

[4] ここでの普遍性を持つ【反応要求】は言語として現れる場合のみならず、人間の行為も含む。

[5] 疑問文は相手に答えを要求しているところから見れば、【行為要求】の性質を持つと言える。

[6] ここでの聞き手の世界知識は聞き手による発話及びその発話に含まれる推意からなる。

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第5話

(2) 【亀沢がドアを開けようとするところに、なかなか開けられない場面】
亀沢「何やってんだよ。開けろよ。」
日本テレビ系列『弱くても勝てます』第6話

(3) 赤岩「お前は日増しに大胆になってるよ。」
白尾「俺は初めから大胆だろ。」
日本テレビ系列『弱くても勝てます』第5話

また、発話の形式と機能にずれがある[7]ように、会話的要求（有標な要求）は、発話の形式に現れる命題レベルの要求性と発話の機能に現れる推意[8]レベルの要求性という二つのレベルで考える必要がある。例えば(4)は、話し手の発話を補足すると、「会議の準備ができました」という意味になり、命題レベルでは要求性を持たない[9]。しかし、聞き手のレミ絵がノートを持って会議に参加する予定であるという状況を踏まえれば、(4)は聞き手に「会議に来てください」という働きかけの性質を持つと考えられることができ、推意レベルでは【行為要求】の性質を持つと言える。

(4) 【会議室から出た同僚が、会議用のノートを持ちながら隣の人と雑談しているレミ絵に向かって】
同僚「レミ絵さん、準備できました。」
フジテレビドラマ『FIRST CLASS』第6話

本稿は、未完結文の推意レベルに現れる会話的要求(【受容要求】【行為要求】【調整要求】の三種類）に基づいて未完結文の種類を考える。その上で、【行為要求】【受容要求】【調整要求】という有標な要求を持っておらず、無標な要求のみ持っている発話を、【要求性なし】の発話とする。以上をまとめると、発話の推意レベルにおける要求性に基づき、未完結文は、【受容要求】【行為要求】【調整要求】【要求性なし】の四種類があると言える。

3.2 文脈

未完結文の要求性を明確にするには、主節を復元する必要がある場合もある。未完結文の主節を復元するには、文脈が重要な指標である。白川（2009）は文脈に言及し

---

[7] 発話の形式と機能のずれは、Searle（1969）の間接発話行為（indirect speech act）という考えでも論じられている。

[8] 推意の定義は加藤（2004）に従う。つまり、「慣習的に含まれる情報で、成立することが経験的に見こまれるが、必ず成立するわけではない」（加藤 2004：71）。

[9] ここでの要求性を持たないというのは、【行為要求】【受容要求】【調整要求】の性質をいずれも持っていないことである。

たが、文脈そのものを定義していない。加藤（2009）は文脈を詳細に述べているので、本稿はその考えを参考にする。加藤（2009）は文脈を一次文脈と二次文脈に分類している。一次文脈には形式文脈、状況文脈、知識文脈がある。形式文脈は「同一セッション[10]の内部で言語的に具体化される発話の連続的な蓄積からなる」もので、状況文脈は「セッションの進行と時間的に平行して存在する物理的な状況を認識することで意味化したもの」で、知識文脈は「セッションが開始する以前から、セッション参加者が持っている知識のうち、言語知識を除外した世界知識[11]にあたるもの」で、二次文脈は「形式文脈と知識文脈、また、状況文脈と知識文脈など複数の文脈を利用して、あるいは、知識文脈の内部で、推論を行うことで新たに得られる想定」である（加藤 2009：214-215）。

本稿は、コーパスやドラマから 118 個の未完結文を集め、加藤（2009）の文脈に関する考えを利用し、未完結文の主節を復元した上で、要求性の違いによって未完結文の種類を考察した。分析の結果、接続助詞のみで容易に要求性を判断できる未完結文もあれば、状況文脈や知識文脈に頼る程度が高く、単に接続助詞から要求性を推測しにくい未完結文もあることがわかった。そこで、次節以下では、要求性と未完結文の文末に現れる接続助詞との関係性によって、未完結文を大きく二種類に分けて考察をする。

4　接続助詞から要求性の種類を推測しやすい未完結文

「たら」「ば」「と」「のに」で終わっている未完結文は、要求性と接続助詞との関係が緊密で、接続助詞からある程度要求性を推測できる。「たら」「ば」「と」は形式文脈のみで推測することが可能で、「のに」は形式文脈と状況文脈によって、推測することが可能である。

4.1　形式文脈のみによる未完結文

4.1.1　「たら」「ば」「と」の統語的整理

「たら」「ば」「と」の前にどちらも否定形の「ない」とアスペクトの「ている」が来ることは可能であるが、テンスを表す「た」は使用されにくい。しかし、実際の使用では、「たら」「ば」「と」の三つの表現にはそれぞれ違う性質も見られる。(5)と(6)に示しているように、[12]「たら」は「どうですか」とも「どうしましょう」とも共起することが可能で、「ば」は「どうですか」[13]としか共起できず、「と」は両方とも共起しにく

---

[10] セッションとは、「やりとりの開始から終了までの言語行動の全体」（加藤 2009：206）である。

[11] 世界知識は「個人が持つ、世界に関する知識の総体」（加藤 2009：209）である。

[12] (5)と(6)は完全文という前提での考察である。

[13]「たら」と「ば」は両方とも「どうですか」と共起できるが、「たら」は必ず発話時

い。そのため、「たら」「ば」「と」で終わる未完結文は、要求性を持つ発話にしか使われないにも関わらず、性質が異なる。

(5) a 静かにしたら、どうですか。
b 静かにすれば、どうですか。
c *静かにすると、どうですか。
(6) a でも、そんな大金を渡して、彼が戻って来なかったら、どうしましょう。
b ?でも、そんな大金を渡して、彼が戻って来なければ、どうしましょう。
c *でも、そんな大金を渡して、彼が戻って来ないと、どうしましょう。

(5)と(6)にある「たら」と「ば」の完結文を未完結文にすると、それぞれ(5)'と(6)'のようになる。(5)'と(6)'は次のような相違点が見られる。(5)'はイントネーションが上昇調になるのが普通で、主節は「どうですか」という決まっている表現に復元できる。話し手からの提案を表すのが主である。その意味で言うと、(5)'の未完結文は慣習性に基づいて省略されたものである。それに対して、(6)'は、イントネーションが上昇調にならないのが普通で、主節は「どうしよう」「困るなあ」「まずいだろう」などの様々な形式に復元できる。その復元できる形式は決まっていないが、事態に対する好ましくない・避けたい・いやだという判断や評価を表す点は同じである。

(5)' a 静かにしたら?
b 静かにすれば?
(6)' a でも、そんな大金を渡して、彼が戻って来なかったら。

(5)と(6)に示しているように、「たら」「ば」と「と」の性質が異なるので、次は実例と関連しながら、「たら」「ば」と「と」に分けてそれらの特徴を考察する。

4.1.2 「たら」「ば」で終わる未完結文

Kato (2014) は、条件節の典型的な非従属化が「〜たら」と「〜ば」で終わるものであり、基本的に省略される主節が疑問文に限定され、アドバイスや勧誘を表すという特徴があると述べている。集めた「たら」「ば」の8例はすべて提案や勧奨を表す【行為要求】の性質を持っている。その中の6例は聞き手に動作の実施を要求しているが、2例は聞き手に知識の提供を要求している。

(7) 【勉強する気のない赤岩に向かって】
柚子「試験前ぐらいは勉強したら?」

に聞き手に行為を求めることを表しているのに対して、「ば」は「そういうところでみんな静かにすればどうですか」のように必ずしも発話時に聞き手に行為を求めているのではなく、話し手のある種の評価を表す場合もある。

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第4話

(8) 【柚子が野球選手になりたいということについて】
柚子の母「いっそ男子として試合に出しちゃえば？」
監督「ばれたら出場停止ですよ。」

日本テレビ系列『弱くても勝てます』第3話

(7)は「たら」、(8)は「ば」の例である。(7)と(8)は両方とも聞き手に動作の実施を要求している例である。(7)の主節を復元すれば、「試験前ぐらいは勉強したらどうですか」になる。つまり、(7)で、話し手の柚子は、「〜たら」という未完結文を通して、聞き手の赤岩に勉強するという行為を要求している。しかもその要求される行為の内容は、未完結文の形式文脈に現れているので、主節を復元しなくてもわかるものである。(8)も(7)と同じように、「〜ば」で終わっている未完結文の主節を復元すると、「試合に出しちゃえばどうですか」になる。つまり、話し手である柚子の母は「柚子を試合に出す」という提案を通して、聞き手である監督に動作の実施を要求していると言える。

(9) 【新しく開発された薬を山田という患者に使うかどうかについて】
部下「この患者で試すということですか。」
教授「病院にとって、患者は二種類。絶対死なせてはならない患者とそれ以外の患者だ。」
部下「でも、万が一副作用が起きたら。」
教授「彼は術後間もない進行胃がんの患者だ。いつ何が起きたとしても不自然はない。」

TBS系列『アリスの棘』第4話

(7)と(8)に対して、(9)は聞き手に知識の提供を要求している例である。(9)では、話し手は部下で、聞き手は教授である。(9)は山田という第三者についての話題である。部下はまず「ということですか」を通して患者に薬を使わせるかどうかについて教授に確認を求めている。教授の回答を受けた後に、部下は「たら」で終わる未完結文を使っている。「万が一副作用が起きたら」は「新しい薬を使った場合に」という限定条件を補足できる。「たら」で繋ぐ従属節と主節には時間の前後関係がある。「万が一」は可能性としての事実を述べているので、主節は仮定事実が起こった後の結果になる。そこで、(9)の主節は、「どうしましょう」や「まずいでしょう」などのような否定的な評価の意味を含む表現に復元できる。つまり、(9)は、話し手は聞き手に動作の実施を求めているのではなく[14]、知識の提供を要求しているとわかる。同時に、二次レベルで、事態に対する話し手の判断や評価という感情も付随されていると言える。

[14] もし対策を実施するには、聞き手が実際の動作を取る必要があるなら、聞き手への行為要求になる。だが、それは知識を提供する要求の次の段階にあるものである。

知識の提供を要求する「たら」の使い方に対して、(7)で示す「ば」は、「どうしましょう」と共起しにくいので、知識の提供を要求する用法も見つけられなかった。

以上より、「たら」「ば」で終わる未完結文は意味機能が固定されている側面があるとわかる。「ば」には聞き手に動作の実施を要求する機能しかないが、「たら」には聞き手に動作の実施を要求することと知識の提供を要求することの二つの機能がある。「ば」と「たら」は聞き手に動作の実施を要求するときに、イントネーションが上昇調になり、未完結文に現れる動詞の動作主が聞き手になり、主節を「どうですか」のように復元できる。また、聞き手に求める動作の具体的な内容は未完結文の形式文脈に現れる。他方、「たら」は聞き手に知識の提供を要求するときに、イントネーションが上昇調にならず、未完結文に現れる動詞の動作主が聞き手以外のものになり、主節が「どうしよう」「困るなあ」などの表現に復元できる。また、事態に対する話し手の否定的な判断や評価を表す。

4.1.3 「と」で終わる未完結文

集めた「と」の8例のうち、4例は【行為要求】の特性を持つが、他の4例は【要求性なし】の例である。この8例には、二つの共通点が見られる。一つは、一律に「〜ないと」という否定の形で終わっていることである。もう一つは、欠如されている主節が、全て「だめだ/いけない」などの否定的な評価を含む文に復元できることである。そこで、「と」で終わる未完結文は、「ないと＋否定」の省略によるものであるとわかる。否定と否定を組み合わせて強い肯定を構成する表現は、どの言語にも見られるが、日本語は「なければならない」や、「〜ないと〜ない」、「〜べからず」のような表現が選好され、助動詞相当の形式に文法化している。そして、否定を含む従属節と否定を含む主節の組み合わせが慣習化しているからこそ、「ないと」のように省略が可能になったと言える。

(10) 母「あなたのキャッチボールの相手してくれたもの。お父さんの代わりに。恩返ししないとね。」
娘「うん。」
日本テレビ系列『弱くても勝てます』第3話

(11) 同僚「ちなみちゃんはもともとファッションの仕事とかしたかったんだよな。」
ちなみ「まあね。もう好きなことにこだわっていられる年でもないし。現実見ないとね。」
フジテレビドラマ『FIRST CLASS』第1話

(10)と(11)の未完結文はそれぞれ「恩返ししないと」と「見ないと」という否定形の形をしており、主節を同じく「駄目だね」に復元できるが、(10)は【行為要求】の例で、(11)は要求性なしの例である。(10)では、「恩返しする」という動詞の動作主を補うと、「あなた」になるので、(10)は話し手である母は聞き手である娘に「恩返しをする」という行為の実施を求めていると言える。(11)では、「見る」という動詞の動作主を補うと、「私」になる。(11)は、話し手であるちなみが、聞き手である同僚からの質問に答えている場

面で、話し手の答えている内容が自分自身についての情報なので、⑾を【要求性なし】の発話として考えたほうが適切であろう。

以上により、「と」の未完結文は次のようにまとめられる。「用言の否定＋と」の形で現れ、主節は「だめだ」などの否定的な評価を含む文に復元できる。「用言の否定＋と」は義務を表すような意味を持っている。従属節にある用言に関わる動作を行う動作主が聞き手であれば、義務を相手に課すことになるので、「と」の未完結文は【行為要求】の性質があり、聞き手が要求されている動作は用言そのものになる。それに対して、従属節にある用言に関わる動作を行う動作主が話し手である場合、義務の意味である点は変わらないが、行為要求は話し手自身に対して行うことは考えられないので、「と」の未完結文に行為の要求性はないと言える。

4.2　形式文脈と状況文脈による未完結文

「たら」「ば」「と」と違い、「のに」で終わる未完結文は、形式文脈のみによって要求性の種類を推測にくく、状況文脈と緊密な関係を持っている[15]。

「のに」は伝統的には「逆接」の接続助詞に分類され、対照性を強調する機能を持っている。渡辺（1995）は、「Ｐノニ、Ｒ」を「のに」の日常言語的論理構造と考え、ＰからＱが予想／期待されるノニ、実際にはＲであるという機能があると述べた。つまり、「のに」は、事態が話し手の希望や期待・予測・予期と異なることを述べるのが本来の機能である。そこから、非難・悔恨といった感情的な解釈を推意として引き出すことができる。そこで、「のに」は基本的に話し手の感情を表し、【要求性なし】の発話として現れる。しかし、話し手の不満を招く理由が違うことによって、「のに」で終わる未完結文には要求性が現れる可能性もある。具体的に言うと、「のに」で終わる未完結文は、その不満が聞き手以外の行為などに起因する場合は、単に話し手の不満を表す【要求性なし】の発話であるが、その不満が聞き手の行為などに起因する場合は、要求性を持つ可能性がある[16]。

⑿　【今日は本来MIINAに仕事はないが、再撮によって、仕事をすることになった】
川島「MIINAさん、ごめんなさい。再撮なんて。」
MIINA「超無駄。今日オフだったのに。」

---

[15]「たら」「ば」「と」は、省略されている形式がある程度固着化しているので、文脈との関係が相対的に弱く、推意の取り消しが難しく、慣習的な推意と考えられる。それに対して、「のに」は、省略されている形式が決まっておらず、文脈との関係が強く、推意の取り消しが可能である。

[16] 話し手が聞き手の起こした事実に対する不満を言い出すことは、間接的に聞き手に対して評価をする行為とも理解できる。更に、その事実に関わる行為がまた生じる可能性があれば、発話には聞き手に行為を要求する可能性も現れてくる。但し、その要求性は必ずあるわけではなく、取り消し可能性を持つ。

例えば、⑿は話し手の不満が聞き手による場合である。⑿で、「今日オフだった」という表現から、発話時点で「今日オフではない」という状況に変化したことがわかる。しかも、「オフではない」のは話し手の希望に反する。そこで、形式文脈によって、⑿は「今日はオフではない」という事実に対する話し手の不満を表すことがわかる。そして、⑿には、今日を「オフだった」ことから「オフではない」ことにしたのは、聞き手の川島が所属する会社側に責任があるという状況文脈がある。その状況文脈によって、⑿の未完結文には、事実に対する不満を持つと同時に、聞き手に対する不満や非難もある。聞き手に対する不満や非難は聞き手に対する評価なので、⑿は【受容要求】の性質も持つと考えられる。更に、聞き手にこれから同じようなミスを犯さないことや仕事をしっかりすることを要求している可能性もあると考えると、⑿には【行為要求】の性質もあると言える。

⒀ 【エアコンがおかしくなって、話し手が寒い部屋から出た後】
事務官「29度まで上げてるのに。」
フジテレビ系列『HERO 2』第4話

⑿に対して、⒀は、話し手の不満を招いたのが聞き手以外のものであるので、【要求性なし】の未完結文である。⒀には、29度まで上げても部屋が寒いという状況文脈がある。⒀の「のに」は、その事実に対する話し手の不満を表す。エアコンの調子が悪いという状況文脈から、話し手の不満をもたらす理由は、聞き手以外のもの（エアコン）であることがわかる。そこで、⒀は聞き手とは関係なく、単なる話し手の感情を表す【要求性なし】の発話である。聞き手との無関係性によって、⒀のような未完結文は、実際に独り言として現れることも可能であろう。

5　接続助詞から要求性の種類を推測しにくい未完結文

「たら」「ば」「と」「のに」と違い、「ので/んで」「から」「が/けど」「し」「て」で終わる未完結文は、その要求性が接続助詞のみから推測しにくく、文脈と緊密な関係を持ち、場面の変化とともに違う要求性が現れうる。ここでは「から」を代表として、未完結文に現れる要求性の種類を考察する。

⒁ 【柚子がみんなに大事なことを言っている最中、亀沢が居眠りをしている場面】
青志「亀沢！今柚子が大事な話をしてるから。」
日本テレビ系列『弱くても勝てます』第3話

⒁は【行為要求】の例である。⒁で、話し手は青志で、聞き手は亀沢である。「柚子が大事な話をしてるから」という形式文脈、柚子の話す対象の一人である亀沢が寝て

いるという状況文脈、「寝ていると人の話が耳に届かない」という知識文脈から、未完結文の主節を「起きなさい」や「柚子の話を聞きなさい」のように復元できる。また、「亀沢」という呼びかけは、相手を起こすという機能を持つと考えられるので、起きるという行為より、⑭の発話内力は、話し手である青志が聞き手である亀沢に柚子の話を聞くという行為を要求していると考えたほうが適切であろう。

⑮ 【吉成は研修生で、白雪は同じ職場の先輩である】
吉成「私、新人アルバイトの吉成ちなみです。皆さんよろしくお願いします。」
白雪「ちょっと、あなたの自己紹介なんていらないから。」
フジテレビドラマ『FIRST CLASS』第1話

⑮は【受容要求】の例である。⑮で、話し手は白雪で、聞き手は吉成である。聞き手が自己紹介をしているという状況文脈と「あなたの自己紹介なんていらない」という形式文脈から、⑮の主節を「やめてください」のように復元できる。「あなたの自己紹介なんていらないから、やめてください」という文の形式から言えば、話し手は聞き手に行為を要求しているようにも見える。だが、聞き手の自己紹介が終わった後に話し手が「あなたの自己紹介なんていらないから」と禁止の意を表したという状況文脈は、知識文脈上、話し手の不満を表していると解釈できるため、⑮は【行為要求】ではなく、聞き手に関する話し手の評価を聞き手に受けてもらうことを要求する【受容要求】として考えたほうが適切である。即ち、話し手は聞き手に対して、「あなたはまだここで自己紹介できるような立場ではない」という評価を下している。

⑯ 【柚子が野球選手になりたいということに対して】
柚子「何で全部だめなの。」
監督「そうやってマネージャーの仕事放棄していること自体もう勝負の足引っ張ってるだろ。」
柚子「諦めませんから。」
日本テレビ系列『弱くても勝てます』第3話

⑯は【調整要求】の例である。話し手は柚子で、聞き手は監督である。まず、⑯には、柚子が野球部のマネージャーであるという状況文脈と、柚子が野球選手になることを希望しているという知識文脈がある。その状況文脈と知識文脈によって、柚子の願望に対する監督の返事には、「マネージャーの仕事を怠らずやりなさい」という推意があることがわかる。また、柚子の発話である「諦めません」の対象を「野球選手になりたい気持ちを」のように補足できる。つまり、柚子の「諦めませんから」という形式文脈は、監督の発話にある推意に対する答えである。言い換えれば、聞き手の「マネージャーの仕事を怠らずやる」という推意に対して、話し手は形式文脈を通して拒否する意を表し、「柚子はマネージャーではなく、野球選手として行動する」のように聞き手の考えの調整を求めている。そこで、⑯の未完結文は、主節を復元しなくても

意味機能が完結しており、主節を復元しようとしても、「ご理解ください」などのような意味の希薄なものになるだろう[17]。

(17) 【大学院に行くと決めた人をほめた後】
ア「私なんか、全然もう、大学入学したときから、全然、院なんか頭になかったですからね。」

『BTSJ 初対面雑談 2』

(17)は【要求性なし】[18] の例である。話し手が大学院に行くと決めた人をほめたことから、(17)の発話には、話し手が院に行く人に対してプラスの評価を持つという知識文脈があるとわかる。その知識文脈と「私なんか」「全然、院なんか頭になかった」という形式文脈や、話し手が大学院へ行くと決めた人と同じような大学生であるという状況文脈から、(17)は話し手が自分に対するマイナスの評価を下していると言える。そこで、(17)の主節を復元しようとしても、「私は全然だめだ」などのような自分に対するマイナスの評価になるだろう。つまり、(17)は話し手の個人の感情で、【要求性なし】の発話である。

6 まとめ

本稿は文脈によって主節を復元した上で、発話に現れる要求性の違いによって未完結文を分類した。具体的には、まず要求性に基づき、未完結文を分類する方法を提案した。即ち、推意レベルから未完結文における有標な要求（会話的要求）によって、未完結文を【要求性なし】【行為要求】【受容要求】【調整要求】の四種類に分けることである。そして、118 の実例に基づき、要求性を通して未完結文を考察した結果、未完結文には、接続助詞から要求性を容易に推測できるタイプ(「たら」「ば」「と」「のに」)と要求性を推測しにくいタイプ（「ので/んで」「から」「が/けど」「し」「て」）の二種類があることがわかった。本稿は、推意レベルに限定して未完結文の要求性を考察したが、未完結文の違うレベルの要求性と各レベルにおける要求性の関係を今後の課題とする。

---

[17] (16)のような場合は、主節が省略されていると考えるより、接続助詞「から」が付加されているという考えも可能である。主節の省略か接続助詞の付加かを判断する基準は、今後の課題にする。

[18] ここでの【要求性なし】は 3.1 の定義に従う。つまり、(17)は【行為要求】【受容要求】【調整要求】という有標な要求を持っておらず、無標な要求のみ持っている。

参考文献

加藤重広（2004）『シリーズ・日本語のしくみを探る 6 日本語語用論のしくみ』研究社
――――（2009）「動的文脈論再考」『北海道大学文学研究科紀要』128 号　pp.195-223
白川博之（2009）『「言いさし文」の研究』くろしお出版
渡辺学（1995）「ケド類とノニ―逆接の接続助詞―」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（下）複文・連文編』くろしお出版　pp.557-564
Kato, Shigehiro. 2014. “Insubordination types in Japanese -What facilitates them?-”. Asian and African Languages and Linguistics, Vol. 8. pp. 9-30
Searle, John R. 1969. Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language, Cambridge University Press　坂本百大・土屋俊訳（1986）『言語行為 ―― 言語哲学への試論』勁草書房

コーパス

宇佐美まゆみ監修（2011）「BTSJ による日本語話し言葉コーパス（2011 年版）」『人間の相互作用研究のための多言語会話コーパスの構築とその語用論的分析方法の開発』平成 20-22 年度科学研究費補助金基盤研究 B（課題番号 20320072）研究成果

（りゅう　ぎょうへい・北海道大学大学院博士後期課程）